

# 明日香村飛鳥京跡第152次調査 現地説明会資料(2004年3月13日)

調査機関	奈良県立橿原考古学研究所
所在地	高市郡明日香村岡
調査期間	平成16年2月9日～現在調査中
調査原因	学術調査
調査面積	100㎡(平米)
主な遺構	飛鳥時代後期の石組溝、掘立柱塀、土坑、礫敷など
主な遺物	須恵器、土師器(墨書土器・刻書土器含む)、木簡、定木、など
現地説明会	2004年3月13日(土)に実施

## 1. はじめに

飛鳥京跡は高市郡明日香村大字岡に所在する宮殿遺跡です。593年に、推古天皇により、豊浦に移された宮は、小墾田宮に移った後、630年に舒明天皇によって、飛鳥岡本宮に移されます。その後、694年の藤原宮遷都までの間、飛鳥の地に岡本宮、板蓋宮、後岡本宮、浄御原宮が次々に営まれました。今回の調査は、飛鳥京跡の範囲確認を目的とした学術調査で、調査面積は100㎡、2004年2月9日から発掘調査を行っています。調査地は、飛鳥京跡の内郭から北へ約600m、現在の飛鳥寺から南南西へ約300mの地点にあり、飛鳥京跡苑池遺構は調査地の南西約300mに位置します。地理的には飛鳥川東岸の平坦地に立地しています。

## 2. 発掘調査の成果

発掘調査の結果、飛鳥時代後期の石組溝、掘立柱塀、土坑、礫敷を検出しました。礫敷は調査地の東側と北西隅を除き、全面で確認でき、多量の土器片が廃棄されていました。石組溝は南北に走るもので、南から北に下がっています。近世以降につくられた暗渠により、東壁の一部が破壊されていますが、上面で幅1.8m、底面で幅1.1m、深さは0.8mを測ります。石組溝の両側壁は、花崗岩を積み上げたもので、最下段には特に大きな石材を使用していますが、底面には石を敷いていません。溝の中からは大量の土器が出土しており、上層と下層の土器に時期差を認められないことから、石組溝は短期間のうちに埋まったことがわかりました。

出土遺物には、多くの土師器、須恵器の他、木簡や定木と考えられる木製品があります。木簡は調査中であり、書かれている内容の詳細は今後の課題です。また、木簡以外の文字資料には刻書土器と墨書土器があり、刻書は「岡本」、墨書は「水」と書かれています。「岡本」の刻書土器は石神遺跡でも出土しており、石神遺跡のものは愛知県からの搬入品と考えられています。今回の出土土器も同様のものである可能性があります。

掘立柱塀は、石組溝の西で検出しました。2.4～2.7m間隔で、柱または柱痕跡が並んでいます。調査地では四間を確認しました。直径約1.0～1.2mの隅丸方形の掘りかたの中に、直径約0.3mの柱を確認しました。石組溝と平行につくられており、溝と同時期のものと考えられます。

これらの遺構は2時期に分けることができ、①石組溝とそれに伴う掘立柱塀がある段階と、②石組溝と掘立柱塀の廃絶後、礫敷を行う段階があります。しかし、石組溝と礫敷から出土した

土器はともに天武から持統天皇の時期のもので、石組溝が廃絶してから、短期間のうちに礫敷がつくられたことがわかりました。

### 3. まとめ

これらの遺構の中で、注目されるのは石組溝と掘立柱塀です。石組溝は飛鳥京跡に関わるこれまでの調査の中でも最大級のものであり、基幹排水路と考えられます。この石組溝の延長線上で同様の溝は検出されていません。しかし、その規模から、飛鳥京の水を集めて外郭をめぐる石組溝の延長であると考えられます。

石組溝に付属した掘立柱塀に関しては、なんらかの施設があったのは確かですが、調査面積が小さく、どのような施設であったのかはわかりません。しかし、飛鳥の宮殿地域と飛鳥寺の間の地域はまだ発掘調査が進んでおらず、当時の様子があまりわかっていないことから、今後、飛鳥京の姿を解明するうえで、重要な成果であるといえるでしょう。



第1図 遺跡周辺地形図

「国土地理院発行 1/25,000 地形図（畝傍山）を使用」





写真1 調査地全景(北から)



写真2 石組溝(北から)

本資料は、奈良県立橿原考古学研究所調査2課松井一晃・十文字健が作成した。